

(2) 「中医鍼灸で難病に挑む」

趙吉平

(北京中医药大学東直門病院)

病例検討

男性 61歳 インドネシア華僑

主訴：

少腹（※1）痛 3年

病歴：

少腹痛がひどく、昼夜痛むが夜が特にひどい。夜間に7回～8回も尿に起る。尿痛あり不快感をともなう。西洋医学の診断名は「慢性前立腺炎」。

治療経過：

国内外で中西結合医療を探し3年になる。鍼灸治療を受け始めて半年（インドネシア、日本、香港、上海）、既往取穴は中脘、関元、三陰交、陰陵泉、腎俞、膀胱俞、太溪など。

詳細病状：

極度の疼痛による苦痛の顔貌、治療に対する不信感が露呈している。少腹痛に伴い陰経部の攣縮性の痛み。情緒が不安定で躁動状態、夜間の痛みが激しく（痛む時間が決まって2時ごろ）2時間ほど睡眠不足を感じ、時にはまったく寝付けない。飲食、大小便は正常。膝以下の足の三陰經を初診時に診察すると、両蠡溝穴に圧痛（+++）発見する。舌辺尖紅、瘀斑有、舌苔やや黄膩、脈は弦。

弁証：

経絡弁証を主とし、これに臟腑弁証を組み合わせる。病位は足の厥陰肝經にあり、気滞血瘀証とする。

取穴：

中極、曲骨、仙骨部夾脊穴、次髎、三陰交、太衝、外關から内關への透刺、蠡溝、期門、百会。

操作 :

まず両蠡溝に平刺、鍼尖は上向き方向、青龍振尾の術を行う。太衝は足心へ向かって斜刺、提挿を行い、10分間の置鍼。次に刺激を強く加えると患者は少腹の攣縮感の緩解を感じ、痛みが少し軽減した。その後、中極、曲骨に鍼尖を下向きで斜刺、提挿する。これにより病所に気を到達させ、刺激量は中程度。三陰交は上に向かって斜刺、外関から内関に向かって透刺、期門は肋間にそって平刺、百会は鍼尖を前方向に1寸刺入、捻転し中程度の刺激量を与える。

治療効果 :

当日夜に疼痛が50%に軽減、4時間就寝できた。2週間の継続治療で精神状態が好転し、疼痛が70%軽減、軽度の隠痛が残った。その後帰国したので、病状は不詳。

討論 :

弁証のよりどころとして①肝経の循行が「足の母指端より発し、上に循り、足関節の上部を通り、内踝1寸、上踝寸の場所で太陰に交わった後、大腿内側を通り鼠径部を通り陰器をめぐる。小腹に至り胃をはさみ肝に属し胆を絡す。後に横隔膜を貫き脇腹に布し、喉をめぐり眼に連なる。額に出でて督脈と会い、頭頂に至る」疼痛部位が足の厥陰肝経の循行線上にあったこと。②夜間疼痛の発生が2時前後と時間が固定していたこと。これは厥陰経の時間である。③圧痛が足の厥陰肝経の蠡溝穴に出ていたこと。④病気が長く続き痛み部分が固定し、夜間に激しいことから血瘀の特徴があること。

取穴の意義 :

局所取穴として中極、曲骨を取穴したが、これは湿熱を清し、活血化瘀の働きがあるため膀胱氣化を助ける。太衝、蠡溝は循経取穴、反応点取穴。祛邪（邪氣を取り払う）の力に優れ、期門を加えることでさらに疏肝の作用を強める。三陰交は疏肝理氣、活血化瘀、安神鎮静の作用で男女ともに諸疾患で良く使われる。焦燥感が強く精神抑鬱に対して理氣治神、調神の穴位である外関+内関、百会、太衝、三陰交を加えた。仙骨部夾脊、次髎で腰神經叢、骨盤神經叢に働きかける。次髎には活血の作用もすぐれる。

※少腹とは小腹（下腹部）両側を指す